

[研究論文] 乳児院入所児の愛着の形成・修復を担う
直接処遇職員への支援の必要性

川島雅子¹

看護学科

The need for assistance to treatment staff responsible for the formation and repair of the attachment of the infant home admission children.

Masako KAWASHIMA¹

Abstract

From the trend of attachment research, to clarify the need for support to the treatment staff that affect the formation and repair of attachment factors and infant home resident children that affect the formation and repair of attachment of infants, it was carried out literature review .

In the formation and repair of the attachment of the infant home entrance children, organization and integration of issues of attachment of the treatment staff itself, is sensitive and sensitivity and responsiveness is important. However, as in the unique environment of the facility, the burden of the treatment staff to work on the formation and repair of love big, because the child to function as me toward the attachment behavior, there is a need to consider support to the treatment staff suggested It has been.

Keywords : Infant home, Attachment, staff support, Attachment Factor

I. はじめに

少子化にもかかわらず児童虐待等による要保護児童数の増加に伴い、乳児院入所児は、ここ十数年で1.2倍、新規入所児の被虐待児の割合は約2倍に増加し、在籍児の32.3%が被虐待児であり、病虚弱・障害など医療・療育の必要な子どもの増加、かかわりの難しい子どもも増加している。また、父母の精神障害、父母の虐待、父母の放任怠惰など関わりの難しい保護者を含む支援を必要とする家族の増加により、その保護者に関わる職員への二次被害を生み出している¹⁾²⁾³⁾。被虐待経験は乳幼児の生命への危険、その後の人格形成に及ぼす影響が大きく、他にも、身体発育不良、精神運動発達の遅滞、感情表出、養育者との関係などに広範な問題を抱えており、乳児院において大人との愛着の関係を重視し、健全な成長発達を支援することが重要である。そのため、乳児院の養育・支援の基本は、①子どものこころによりそいながら、子どもとの愛着関係を育む。②子どもの遊びや食、生活体験に配慮し、豊かな生活を保障する。③子どもの発達を支援する環境を整える⁴⁾と示されている⁴⁾。

愛着は、一般的に、人が特定の他者との間に築く緊密な

情緒的絆であり、ボウルビィは、愛着を「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性」⁵⁾と定義している。そして、乳幼児の愛着行動の発達を4段階に分けて述べている。乳児院入所児は、ボウルビィ⁵⁾のいうところの第1段階人物弁別を伴わない定位(orientation)と発信(signals)行動、第2段階弁別されたひとりまたは数人に対する定位と発信行動、第3段階弁別された人物への近接・接近の維持行動という愛着システムの発動、形成の時期にある。また、虐待など不適切な養育を経験し、愛着の修復を必要とする乳幼児もいることから、乳児院は愛着の発動、形成、修復という3つの大きな愛着の要点がもっとも集約的に表現されており、対応の仕方によっては愛着の過剰システムが形成されることにつながる可能性があり、援助者のありようが大きく影響すると考えられる。

そのため、愛着研究の動向から、愛着の形成・修復に影響する要因と、社会的養護における入所児の愛着の形成・修復を担う直接処遇職員（以後、職員若しくは援助者と表記する）への支援の必要性を明らかにするために文献レビューを行った。

II. 方法

愛着研究の動向を調べるにあたり、その理論的背となる愛着理論に関して、愛着理論の提唱者であるボウルビイの著書と CiNii Book により「愛着理論」「アタッチメント理論」で検索できた書籍およびその引用文献を参考に、愛着研究の発展と成果について整理した。

次に、愛着研究の動向から、愛着の形成・修復に影響する要因と愛着の形成・修復を担う職員(援助者)への支援を明らかにするため文献検索を行った。検索には、医学中央雑誌 web1982 以前~2014 を中心に CiNii Articles、google scholar、日本子ども家庭総合研究所データベースで補完的に文献検索を行った。キーワードは「愛着」「児童養護」「乳児院」「援助者支援」「支援者支援」を組み合わせで検索を行った。海外文献は「Object Attachment」「Orphanage」「Child welfare」「Interpersonal service professionals support」「Interpersonal service professionals aid」のキーワードを組み合わせ、PubMed を中心に、web of sciens1970~2014 を用いて補完的に検索を行った。

III. 先行研究の動向と結果

1. 愛着と援助者支援に関する研究の動向

和文献は、医学中央雑誌 web で「愛着」をキーワードに検索を行ったところ 3680 件あり、原著論文 975 件、解説・総説 1573 件、症例報告 234 件、看護文献 1095 件、治療・診断 330 件であった。原著論文(975 件)を概観すると、乳幼児の愛着を扱った研究は少なく、周産期の母児接触、成人の精神疾患治療等であり、愛着という言葉は出てくるものの、愛着に焦点は当てられていない文献、動物や地域など人以外への愛着に関する文献が大半を占めていた。その中でも、乳幼児に関連する文献では、愛着理論に関する研究が 1990 年前後数件見られ、1990 年代前半には、愛着の形成に関連する研究が散見される。そして、2000 年代からは、愛着は子育て支援や子ども虐待の対応と関連した文脈の中で研究されるようになり、最近では、児童福祉領域での愛着に関連する研究が増えてきていた。

医学中央雑誌 web により、「援助者支援」で検索できた文献は 2 件、「支援者支援」では 26 件であり、「援助者支援」の 2 件は児童養護施設職員への援助者支援に関する研究であった。「支援者支援」の 26 件のうち 23 件は災害時の支援者支援に関する文献であり、愛着に関連する援助者支援に関する研究は少なかった。

海外文献は、PubMed で「Object Attachment」キーワードに検索を行ったところ 6234 件と膨大な数であったため、「Child welfare」と組み合わせで 202 件検索でき、「Orphanage」との組み合わせでは 20 件が検索できた。愛着(Attachment)という言葉は出てくるものの、愛着(Attachment)に焦点は当てられていない文献を除くと、

乳幼児の愛着に関する研究は 69 件であり、概観すると保育園など非親によるケアと子どもの愛着に関する研究 26 件、孤児の施設養護における愛着 15 件、愛着と虐待や精神病理との関連 13 件であった。

「Interpersonal service professionals support」で検索できた文献は 93 件、「Interpersonal service professionals aid」で検索できた文献は 4 件であった。そのうち援助者の支援に関する文献は 11 件あり、医師や看護師のストレス、バーンアウトに関する研究、災害対応時の援助者への支援に関する文献であり、愛着に関連した援助者への支援は見当たらなかった。

2. 愛着研究の発展と成果

愛着理論は、施設入所児の調査から乳幼児期における不適切な母性的養育が、パーソナリティの発達に及ぼす悪影響についての証拠を検討し、研究論文として、1951年にWHOに報告したことに始まり、1969年に定式化された⁶⁾。愛着は、人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的絆であり、ボウルビイ⁵⁾は、子どもが、危機的な状況あるいは潜在的な危機に備えて、養育者との接近、接触を求め維持しようとする行動(泣き叫び、ほほえみ、後を追う、しがみつき、すう)を愛着行動と名づけ、子どもの愛着行動に報いる親(養育者)の行動は、「養育行動」(caregiving behavior)と名づけている。

さらに、ボウルビイは、愛着の形成過程について、エインスワースらの行った研究を参照し、乳幼児の愛着行動の発達を 4 段階で示している。第 1 段階は、誕生から生後 8 週から 12 週頃までの「人物弁別をとまなわぬ定位と発信」であり、他者をじっと見るなどの定位(orientation)と泣く、声を出す、微笑するなどの発信(signals)行動がみられるようになる。しかし、この段階では、これらの反応や行動を向ける対象が特定されているわけではない。第 2 段階は、生後 12 週頃から 6 ヶ月頃までの「弁別されたひとりまたは数人に対する定位と発信」であり、親密な諸反応の強さは増大し、母性的人物に対してより顕著な形で様々な反応や行動が増える。第 3 段階は、生後 6 ヶ月頃から 2、3 歳頃までの「発信ならびに移動動作による弁別された人物への接近の維持」であり、この段階は母性的人物(第 1 愛着者)への愛着を一層強固なものにしていくとともに、誰に対しても示された親密でやや無差別な反応は減少し、ある特定の人だけが二次的愛着対象として選択され、他の人たちは選択されなくなる。すなわち、1 歳を迎えるまでには、それまで受けた養育の経験を基盤とした未発達な内的ワーキング・モデルという愛着関係をもつようになる。そして、見知らぬ人たちは、ますます警戒され、そのうち恐れと情緒的なひきこもりを起こさせるようになる。3 歳頃以降に始まる第 4 段階は目標修正的協調性の形成であり、認知発達に伴い母性的人物の行動やそれに影響する事柄を観察することによって、感情および動機について洞察し得るようになり、関係性を発達させるための基礎が形成され

る。また、この段階になると不在の母性的人物を心の中で表象できるようになる⁵⁾。すなわち、愛着行動は本来、危機事態や疲弊時に特定の対象に保護と心理的安心感を求めるものであり、生涯を通じて活性化し続ける生涯発達にとって重要な行動システムと位置付けられる。人生早期の経験によって重要他者との相互作用体験が表象として組み合わされ、抽象化された、内的ワーキング・モデルが形成される⁷⁾。内的ワーキング・モデルは、早期養育体験における養育者との相互作用に基づいて形成される自他の表象であり、後の対人関係を規定していくとされている⁶⁾。また、母子関係の質が世代間伝達される事実に着目したボウルビイは、内的ワーキング・モデルを中核概念に、分離不安や対象喪失の過程を整理し、極度の抑うつや悲嘆という精神病理を愛着関係の病理⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾として捉え直している。

ボウルビイの共同研究者でもあるエインスワースは、母親の養育行動の質や乳幼児の愛着行動の組織化に明確な個人差のあることを見出し、愛着行動が一時的に活性化される、ストレンジ・シチュエーション法を開発した。そして、乳幼児の愛着の3パターン、A型(回避型)、B型(安定型)、C型(抵抗/アンビバレント型)を評定した¹¹⁾。ストレンジ・シチュエーション法は、親子の分離や再開、ストレンジヤーの入室など8場面から構成され、分離ストレスや新奇性不安が生じた際に、乳幼児が示す愛着行動パターンの差異から、愛着の型を評定するという、主に生後12か月から24か月の乳幼児に適用される観察法である。繁多¹²⁾は愛着研究の知見から、次のように愛着の3つの型を説明している。A型(回避型)は、親を安全の基地として探索活動を行うことがほとんどなく、親との分離場面でそれほど混乱を示さず、再開場面では親を無視したり回避する行動が認められることを特徴としている。B型(安定型)は、親を安全の基地として積極的に探索活動を行い、ストレンジヤーに対しても肯定的な感情や態度を見せることが多く、親との分離場面では悲しみを示すが、再開場面では嬉しそうに親を迎え入れ、積極的に接触を求め、探索活動を再開するという特徴がある。C型(抵抗/アンビバレント型)は、親との分離場面の前から不安兆候を示し、親を安全の基地として探索活動はあまりできず、分離場面では非常に強い不安を示し、再開場面では強く身体的な接触を求めながら、同時に親を激しく叩くなどして怒りを表し、反抗的な態度を取るという特徴が認められる。

愛着の型の出現率は、エインスワースらの調査結果では、A型21.7%、B型66.0%、C型12.3%であり、8か国の32文献をレビューの結果でも乳幼児の愛着の型の比率構成は、エインスワースによる結果とほとんど変わらないと報告されている¹³⁾。日本においても、繁多¹²⁾が、ストレンジ・シチュエーション法による愛着の型の出現率を調査しており、A型6.2%、B型79.2%、C型14.6%の結果から、A型の出現率は少ないと報告している。一方、近藤¹⁴⁾は、文献検討の知見から、ストレンジ・シチュエーション法は、我が国の乳児にとってストレスが高く、測定法

としてふさわしくないとして、家庭場面などでの具体的な行動に依拠した観察法であるQ分類法が有効であるとしている。しかし、その後、Q分類法を用いた研究は日本ではあまりされておらず、乳幼児の愛着タイプの測定そのものがあまりされていないようである。それは、当時、愛着を内的ワーキング・モデルとして生涯発達の視点で捉えることが注目され、乳幼児だけでなく大人の愛着の型の測定が可能になったことが影響していると思われる。

メインら¹⁵⁾は、新たな愛着の型として、ABC分類に収まりきれない第4の型として、無秩序・無方向型であるD型を見出した。D型(無秩序・無方向型)は、ストレンジ・シチュエーション法のような状況において、近接と回避という本来なら両立しない行動を同時的あるいは継時的に見せたり、不自然でぎこちない動き、タイミングのずれた場違いな行動や表情、突然すくんでしまったり、うつろな表情でじっと固まって動かなくなったり、時折、養育者の存在におびえているようなそぶりを見せたり、むしろ初対面の人に自然で親しげな態度をとることも少なくないという、組織化されていない、明確な方向性を持たない行動特性が認められる愛着の型とされている¹⁶⁾。藤岡¹⁷⁾は、D型に関する研究知見から、D型は虐待など不適切な関わりによって生じ、被虐待児ではD型の割合が高率であること、さらに、臨床的知見から無愛着型・無差別愛着型の存在が指摘していると述べ、愛着の5つのタイプを示している。それによると、無愛着型・無差別愛着型は、母親などの養育者と情緒的な関係を形成していない子どものことであり、乳幼児期をに虐待を受け、かなり早い時期から乳児院などの施設で過ごした子どもに多くみられ、特定の大人を好むことなく、自分の欲求を満たしてくれれば誰でもよく、どの大人に対しても無差別的に表面的な親密さを示すが、深い関わりは持てないという特徴が説明されている。

さらに、メインら¹⁵⁾は、乳幼児の母親の愛着の質に着目し、母親自身の愛着表象がどのように語られるかによって、愛着表象の安定・不安定、柔軟性、一貫性を評定するアダルト・アタッチメントインタビューを開発している。アダルト・アタッチメントインタビューによって導出された4つの類型は、アタッチメントの安定性を意味する「自立型」と不安定なアタッチメントを意味する「アタッチメント軽視型」「とらわれ型」「未解決型」である。乳児のA型(回避型)と母親の「アタッチメント軽視型」、乳児のC型(抵抗/アンビバレント型)と母親の「とらわれ型」とは結びつきがあり、母親自身の内的表象や心の状態が、乳児とのアタッチメント関係に深く関連していることが示唆されている¹⁸⁾¹⁹⁾。

愛着研究は、ボウルビイによる愛着理論の定式化から、エインスワースによるストレンジ・シチュエーション法の開発と乳幼児の愛着の型の評定、メインらによる愛着のD型の発見と大人の愛着の型の評定が可能アダルト・アタッチメントインタビュー法の開発があり、発達心理学分野を中心に研究知見が蓄積してきている。近年では、児童福祉分野において、子ども虐待の増加に伴い

愛着への関心が高まっており、愛着の形成・修復に関わる臨床的な支援・介入が行われ、愛着研究は新たな段階を迎えている。

3. 愛着の形成・修復に影響する要因

1) 母親と子どもの愛着に影響する要因

日本においては、母親のわが子に対する情緒的な結びつき、わが子との近接の喜びやわが子を守りたいという母親の感情をマターナル・アタッチメントとして測定している。マターナル・アタッチメント得点の高い母親は、感受性が強く、子どもへの敏速な反応や柔軟な対応を示した²⁰⁾²¹⁾ことから、子どもの愛着に影響すると示唆され、特に産後における母親の乳児に対する愛着の基盤となる²²⁾と報告されている。そして、母親の産後うつや抑うつ²³⁾²⁴⁾²⁵⁾、母親の育児負担感や育児生活の肯定感²⁶⁾²⁷⁾が母親の子どもへの愛着に影響する。また、養育行動に関しては、母親自身の親との関係が、現在の子どもの相互作用における母親の行動を規定し、母子の相互作用時の感度の良さ、情動調律の頻度の高さおよび一貫性が子どもとの愛着形成に影響する²⁸⁾²⁹⁾。すなわち、母親側の要因としては、母親がどのような育児観をもって子育てにあたっているかということが重要であり³⁰⁾、母親の子どもへの愛着が影響する養育行動のあり方が、子どもの愛着の形成への要因と示唆される。

愛着に影響する子ども側の要因として、ボウルビー⁵⁾は、愛着行動をつかさどる5つの反応として、泣き叫び(crying)、ほほえみ(smiling)、後を追う(following)、しがみつき(clinging)、すう(sucking)を挙げており、母性的人物との相互作用の中で示される子どもの愛着行動そのものが、愛着の形成の要因と言える。

また、高橋³¹⁾は、アタッチメントの構成因子4因子「反抗(しない)」「接触」「変化」「忍耐力」を抽出している。それによると、アタッチメント尺度合計点によるHigh群、Middle群、Low群の各群とも「接触」「変化」が抽出されており、「接触」は母子の相互作用によって得られる母親の安全基地の機能を示し、「変化」は新奇な物、見知らぬ人に対する反応を示すものであるという。さらに、High群は「服従(しない)」、Middle群では感情の不安定さを示す「情動性」、Low群では、自分の感情を無理に隠している「抑圧」、「救護(を必要としない)」「忍耐力のなさ」という特徴的な因子があるという。これらの各群は愛着の型を表し、各愛着の型による行動特性であると示唆される。

他にも、愛着と子どもの気質に着目した研究が1980年代に多数あり、子どもの気質によって養育者の対応に差異があることが明らかにされているが、その後の研究では、子どもの気質が母親の愛着と育児の不安に影響するものの、子どもの愛着の形成との関係は明確ではない³²⁾³³⁾。しかし、斎藤ら³⁴⁾は、乳児院の子ども気質と愛着の関係を調査し

ている。それによると、乳児院の子どもたちの気質の特徴として、日常生活の行動や情緒面での収まりの悪さがあり、愛着形成困難群では、順応性のなさ、気分の質、反応強度、注意の持続のなさという気質の問題が顕著である。しかし、愛着形成成功群では、乳児院での1年間の生活体験において、それらの気質の問題に改善が認められたと報告している。このことから、問題となる気質は、愛着形成により改善が見込め、愛着を形成するには子どもの気質を捉えた関わりが必要と示唆される。そのため、乳児院の子どものように、それまでの生育環境に養育拒否や虐待体験がある関係から、気質に特徴がある子どもでは、子どもの気質を、愛着形成に影響する子ども側の要因と考えても差し支えないように思われる。

2) 施設における愛着の形成・修復に影響する要因

虐待が子どもに及ぼす影響から、虐待を受けた子どもを保護する場としての社会的養護において、アタッチメントが重要な関心ごとになっている³⁵⁾。青木³⁶⁾は、分離が行われている施設入所の期間は、適応的なアタッチメント形成の重要な時期であり、施設職員によってアタッチメントの方向づけられた養育が必要であると述べている。虐待などの不適切な養育を受けた子どもは、本来であれば、愛着対象である親に接近し安全感を得ようとするが、愛着対象者自体から暴力を受けているために、近づくことがかえって危険であり、安全感を得るすべがなく混乱が生じる。すなわち、虐待などの不適切な養育が続くことで、アタッチメント形成に深刻な打撃を受け、非安全型の愛着の型であるD型(無秩序・無方向型)は形成されると考えられている³⁷⁾。親による虐待や親の抑うつなどの精神障害のハイリスクな環境にある子どもの愛着の質について検討され、子どもの不安定な愛着や組織化されていない愛着が形成されやすくなる養育者側の条件として、虐待や感情障害による適切な情緒的応答ができないことが挙げられている³⁸⁾。

実母との関係が不適切で外傷的である場合には、不安定なアタッチメント関係の内的ワーキング・モデルがすでに形成されている場合もあり、職員がオルタナティブ・アタッチメント・フィギアとして子どもの発達にとって独自の存在価値を有し、養育者側の、通常より以上の感受性の高さや情緒的応答性が求められている¹⁹⁾。ハウズら³⁹⁾は、子ども虐待により保護施設に入所した16名の幼児を対象に、施設の複数のケア担当者との愛着関係についての調査から、約半数の子どもが、平均6~7か月で施設のケア担当者と新たな愛着を形成したこと、感受性や応答性の高いケア担当者の長期に渡るケアを受けた子どもほど、安定した愛着を形成する傾向があると報告している。また、養育者の感受性や応答性が子どもの愛着行動に影響するため、養育者である母親の感性を改善することが、子どもの愛着行動の安定化に有用であり、乳幼児個人を標的とした治療は乳幼児の愛着の改善には有効性が低いこと、短期間の行

動レベルに焦点をあてた介入のほうが、内的ワーキング・モデルに焦点をあてた長期的介入よりも大きな効果があったと報告されている⁴⁰⁾。

内的ワーキング・モデルに関して、久保田¹⁸⁾は、実証研究をレビューし、人生早期に形成されたアタッチメントの内的ワーキング・モデルが、加工・変容されながら生涯にわたって機能すること、アタッチメントの世代間伝達において子どものアタッチメントの質に影響を及ぼし得るのは、親の過去のアタッチメント経験そのものではなく、過去や現在のアタッチメントに関わる問題をいかに統合し、組織化できているかであると知見を述べている。すなわち、養育者の内的ワーキング・モデル、子どもの中に形成されつつある内的ワーキング・モデルに配慮しながらも、養育者自身の愛着の課題の統合と組織化、養育者自身の感受性と感受性や応答性が、愛着の形成・修復における子どもの愛着行動の安定化を図る上で重要な因子であると示唆される。

4. 乳幼児の愛着の形成・修復を担う援助者への支援

乳児院では、ホスピタリズムという社会的養護の抱える問題の克服過程において、アタッチメントを重要視した子どもと職員の緊密な関係を形成する担当養育制の導入が、ホスピタリズム克服の主要な要因であったと言われている⁴¹⁾。しかし、庄司³⁵⁾は、単に担当児の記録を書く役割の担当制など、施設により担当制の捉え方に違いがあること、交代勤務の中で日々の別れや複数の保育者が関わる環境は、どのようにアタッチメントの形成に影響を及ぼすのか課題であるとしている。現状では、担当養育制により1人の養育者が1~3名の乳幼児の担当養育者になるものの、1人の養育者がみている乳幼児数が日中は4~6人、夜間は平均11.2人である⁴²⁾。日中でも担当児を養育するとは限らず、複数の子どもを養育しているため、担当児だけに関わるわけではない。担当養育者が、自分の担当児をケアできる時間は、勤務時間から計算すると1週間の1/3程度の時間であり、乳幼児との個別の接触時間は少ない状況が伺える。長谷川ら⁴³⁾は、乳児院入所児は、安定した胎内環境に恵まれず困難な養育環境で生育した場合が多く、愛着への悪影響、関係構築には困難を伴うことを、ケースの考察を通してその具体を報告している。それによると、言葉を話すことができない月齢の被虐待児との関わりで保育者が受け取る情緒は、非常に直接的で圧倒的なものであり、受け止めきれないバラバラな反応に身動きができなくなる感覚や、完璧な対応をしなければならないという切迫感を保育者は体験している。さらに、交代勤務や担当児の変更に伴い、担当児と十分に関わっていない不安感や罪悪感、不全感を感じ、子どもの気持ちを受け止める余裕が少なくなるなどの、乳児院特有の問題、現場の保育者の抱える困難がある。その中で、担当児との愛着形成を支援するための定期的ケース会議の実施、担当保育者による個別保育の時間確保という、心理士が中心となって進めた、乳児院の養育体制の

改革をした取り組みがある。それによると、継続型の担当制により母親のような情緒で子どもに関われ、職員の「のめり込み」「抱え込み」「こだわり」等の情緒的問題の解決につながるとうい担当制が機能していることが伺える。しかし、担当児への情緒的関わり故に、子どもの退所に伴う分離の痛みが喪失体験として語られ、継続担当制ではその痛みが非常に大きく、養育態度に悪影響を及ぼす可能性が否定できないため、職員の分離の外傷体験への介入が課題となっている⁴⁴⁾⁴⁵⁾。養育体制の改革により、愛着の形成・修復のために担当養育制がより機能するようになっても、職員には分離の外傷体験が生じ、その外傷体験を抱えたまま次の子どもを担当することが繰り返されることになり、施設という特異な環境では、愛着の形成・修復に取り組む職員の負担は大きいことが伺える。

他に、乳児院における愛着に関する支援では、個別処遇支援や遊戯療法による愛着関係構築⁴⁶⁾⁴⁷⁾⁴⁸⁾、家族再統合にむけた取り組み⁴⁹⁾⁵⁰⁾⁵¹⁾が報告されているものの、症例報告にとどまっている。また、心理士は、被虐待児の担当職員がその子にとっての安全基地(愛着対象)となるように働きかけ、施設職員は治療的養育者として関わるということが重要⁵²⁾⁴³⁾という職員間の支援の必要性が報告されている。しかし、担当制がどのように機能しているのか、愛着の形成・修復の取り組みにおける援助者のあり方、援助者がどのような支援を受けているかは明確ではない。

被虐待児への対応では、杉山⁵³⁾は、子どもの虐待を第四の発達障害と捉えて、マイナスからの愛着関係構築による発達支援の必要性を提言している。乳児院の被虐待児への支援においてもマイナスからの愛着関係構築による発達支援が重要であり、職員には高度な専門性が求められる。ある乳児院の保育士は「親代わり」という思いが強い、「親代わり」として愛着を育ててやりたい⁵⁴⁾と現場での思いを語っている。しかし、なかなか担当の子どもと関われない<余裕のない勤務体制によるケアへの影響>や<職員間の連携困難>という専門職としてのやりがいを感じない理由⁵⁵⁾からも、現場では、愛着を育もうにも子どもとの個別に関わる時間確保やの難しさが伺える。

近年では、被虐待児の愛着の形成・修復に関して専門家による介入・支援がされるようになってきている。アタッチメントの形成の問題や虐待や喪失体験によるトラウマを受けた、社会的養護にある子どもたちを対象にした心理療法プログラム⁵⁶⁾⁵⁷⁾、児童養護施設の被虐待児とケアワーカーを対象にしたアタッチメント・ベイスト・プログラムの作成と有効性が報告されている⁵⁸⁾⁵⁹⁾⁶⁰⁾。また、青木は、文献検討の知見から、乳幼児虐待・ネグレクトに対するアプローチは重要性が高いとして、愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチの理論的枠組みを提示し、事例の治療経過から理論的枠組みの実践応用の可能性を検証している⁶¹⁾⁶²⁾⁶³⁾³⁷⁾。これらのプログラムは、被虐待児と養育者の関係性に焦点を当てたプログラムであり、援助者支援の観点には含まないようである。被虐待児

の施設入所が増加し、児童虐待対策の一環として社会的養護施策が展開されている⁶⁴⁾現状があり、乳児院では被虐待児への対応だけでなく実親への対応も求められ、その過程で職員がトラウマになる二次被害が報告されているものの、その対処は遅れており、援助者支援に関する研究は少ない。

援助者支援に関しては、もともと、ストレスやメンタルヘルスに関心があった医療・保健・福祉領域では、業務管理、組織管理の観点から、離職予防を意図し、援助者への支援はメンタルヘルスの支援と考え、研究が進んできている。その中で、藤岡⁶⁵⁾は、「援助者支援は、子育て支援そのものである」として、援助者の表情、しぐさ、声、知的な活動、感情・感性の安定性など援助者としての質を確保する上で、共感疲労、共感満足という概念を援助者支援の中に位置づけている。そして、共感疲労が愛着形成の阻害要因としての援助者のFR行動(おびえたような/おびえさせるような行動)を誘発する可能性が高く、共感疲労が援助者個々で最適な共感疲労水準が保たれることが重要であると述べている⁶⁶⁾。しかし、被虐待児のケアの困難感、ケア体制、被虐待児へのケアに関連する知識は共感疲労に関係し、共感疲労を高める⁶⁷⁾と報告されているように、現場において最適な共感疲労水準を維持することは易しいことではないことが伺える。

藤岡¹⁷⁾は、援助者支援の観点も持ちながら、児童養護施設の愛着に課題を抱える子どもと養育者である職員を主な対象として、子どもの関係の振り返り、職員自身の愛着関係の見直し、職員自身の共感疲労、共感満足の振り返りなどを行う愛着臨床アプローチを開発し実践している。そして、急激なトラウマワークだけでなく、日常的な安全確保を前提として、愛着形成への視点が重要になるとして、日々の生活の中での愛着の形成・修復の重要性を述べている。乳幼児に話かけや抱っこなどの接触により意図的に働きかけ、声の発し方や表情、動き、活気などから子どもの変化を察知して意志の疎通を図る親密な相互作用、その日々の繰り返しの中で子どもの愛着は形成・修復され、心の中に安定した感情、安心感、安定感を作り出すことができる。そのためには、援助者が安定した状態であることが子どもとの二者関係を構築するのに重要な要因となる¹⁷⁾。

IV. 考察

愛着研究の動向から、愛着研究の発展と成果、愛着の形成・修復に影響する要因、愛着の形成・修復の取り組みと援助者支援についてこれまでの理論と研究成果を概観して整理してきた。

1. 愛着研究の発展と成果

ボウルビイは愛着、愛着行動、内的ワーキング・モデルの概念定義をしている。ボウルビイの愛着の定義では、愛着は本来、子どもが疲労・空腹・病気・あるいは

脅威を感じたときのネガティブな情動を低減しようとする生得的な行動システムと理解でき、愛着行動の発動にはネガティブな情動が関係している。そして、内的ワーキング・モデルから安定した適切な応答が得られるとネガティブな情動が静まり、その体験の繰り返しによって、内的ワーキング・モデルが安心で安全な基地になり、愛着対象への情緒的な絆が形成されていくと理解できる。

エインスワースは、愛着を行動システムとして捉え、ストレンジ・シチュエーションのように意図的に危機的場面を作り出して、乳幼児がどのような行動をとるのかを観察し、その行動を類型化し、愛着の型の個人差に関して研究を展開している。愛着は、恐れ、探索、親和といった行動システムと有機的・整合的に連携して、その時々状況に適応的な行動を組織化し、個体の生き残り確率を高めている⁵⁾といわれ、その行動システムから愛着を行動として捉えることができるということは、愛着の型を評定するだけでなく、愛着の形成・修復の成果を乳幼児の示す行動から捉えることも可能であると考えられる。

メインらは、乳幼児の愛着の型の個人差を生み出す要因に着目し、子どもの愛着行動に依る母親の養育行動には、母親自身の内的ワーキング・モデルが影響していると考え、養育者自身に内的ワーキング・モデルに関して語ってもらうことで、大人の愛着の型が評定可能になった。このことは、愛着研究の対象を拡げ、さらに、乳幼児の愛着を養育者の愛着と関連させて捉えることも可能にし、子どもと養育者の関係性や愛着の世代間伝達を明らかにすることにつながった。職員の内的ワーキング・モデルに関して語ってもらうことは、入所児と職員の関係性や職員の養育行動の特徴を捉える上で示唆を与えてくれるものと思われる。また、愛着研究の発展の過程でも愛着は、情緒的絆、行動システム、内的ワーキング・モデルと捉えられており、概念定義をするだけでなく、養育現場で愛着をどのように理解しているのか留意する必要がある。

2. 愛着の形成・修復に影響する要因

母親の子どもへの感情であるマターナル・アタッチメントに着目した研究では、感受性、子どもへの反応・対応、母親の産後うつや抑うつ、育児負担感、育児生活の肯定感が、子どもへの愛着に影響すると要因としてあげられている。また、養育行動に着目した研究では、母親自身の親との関係、母子の相互作用時の感度の良さ、情動調律の頻度の高さ及び一貫性、育児観が養育行動を規定し、子どもとの愛着形成に影響すると述べられている。これらの要因を整理すると、母親の子どもへの愛着という対児感情、対児感情によって導かれる感受性や応答性、養育行動のあり方が母親側の要因と考えられる。

愛着に影響する子ども側の要因は、母性的人物との相互作用の中で示される子どもの愛着行動⁵⁾であることは、疑

う余地がない。また、高橋の抽出した、アタッチメントの構成因子³¹⁾は、愛着の型による行動特性とほぼ同様であると示唆され、愛着の型の違いによる行動特性が愛着に影響する子ども側の要因と考える。また、気質と愛着の関連は明確ではないものの、子どもの気質が養育者の対応や育児の不安に影響するという結果もあり、乳児院のように、それまでの生育環境の影響により気質に特徴がある子どもでは、子どもの気質が、愛着形成に影響する要因と考えられる。

日本の現状では、社会的養護の施設は、虐待を受けた子どもを保護する場になっており、虐待などの不適切な養育が続くことで、愛着形成に深刻な打撃を受け、非安全型の愛着が形成されている子どもも多くなっている。愛着の形成・修復に関しては、養育者が適切な情緒的応答ができることが重要であり、職員がオルタナティブ・アタッチメント・フィギアとして通常以上の感受性の高さや情緒的応答性が求められている。すなわち、乳児院においては、実親を主要な愛着対象者としながら、職員が新たな代替的愛着者として、愛着の課題を抱えている乳幼児とオルタナティブ・アタッチメントを形成していくという、施設特有の愛着の形成・修復があり、援助者のありようが大きく影響すると考えられる。感受性や応答性は複数の研究で援助者側の要因としてあげられており、援助者が過去や現在の愛着に関わる問題をいかに統合し、組織化できているかが重要であり、安定した内的ワーキング・モデルが感受性や応答性に影響することが伺える。特に不安定な内的ワーキング・モデルが形成されている乳幼児では、乳幼児個人を標的とした治療は乳幼児の愛着の改善には有効性が低く、行動レベルに焦点をあてた介入が、子どもの愛着行動の安定化に有用である⁴⁰⁾と報告されているように、愛着の課題を子どもの行動からアセスメントし、援助者側は高い感受性や応答性で意図的に相互作用を持つことが重要と考える。そのため、養育者の内的ワーキング・モデル、子どもの中に形成されつつある内的ワーキング・モデルに配慮しながらも、養育者自身の愛着の課題の統合と組織化、養育者自身の感受性と感受性や応答性が、愛着の形成・修復における子どもの愛着行動の安定化を図る上で重要な因子であると示唆される。

3. 愛着の形成・修復の取り組みと援助者支援

乳児院では、愛着を重要視した子どもと職員の緊密な関係を形成する担当養育制の導入がホスピタリズムの克服に効果があったと言われている。しかし、担当養育制を導入していても、現場では担当児だけの養育をするわけではなく、乳幼児と個別の接触が持ちにくい状況があり、愛着を育もうにも子どもとの個別に関わる時間確保の難しさが伺える。また、交代勤務の中で日々の別れや複数の養育者が関わるといった環境特性があり、被虐待児との関わりで受け止めきれない身動きができなくなる感覚や、担当児と十分に関わっていない不安感や罪悪感、

不安全感を感じ、子どもの気持ちを受け止める余裕が少なくなるなどの困難を、現場の保育者は抱えている。乳児院の養育体制を改革し、母親のような情緒で子どもに関われるようになったという取り組みもあるが、担当児への情緒的関わり故に、職員に分離の外傷体験が生じ、その外傷体験を抱えたまま次の子どもを担当し、外傷体験が繰り返される可能性がある。これらのことから、施設という特異な環境では、愛着の形成・修復に取り組む職員の負担は大きいことが伺える。他にも乳児院における愛着に関する支援が報告され、被虐待児の担当職員が、その子にとっての安全基地となる治療的養育者として関わる重要性、職員間の支援の必要性は示唆されているが、担当制がどのように機能しているのか、援助者にどのような支援がされているかは明確ではない。

近年では、被虐待児の愛着の形成・修復に関して専門家による介入・支援がされるようになり、被虐待児と養育者の関係性に焦点を当てたプログラムが実施されているが、養育体制や職員の勤務体制等、施設的环境特性、援助者支援の観点は含まれていないようである。その中で、藤岡⁶⁵⁾は、「援助者支援は、子育て支援そのものである」として、援助者としての質を確保する上で、共感疲労、共感満足という概念を援助者支援の中に位置づけ、愛着臨床アプローチを開発し実践している。愛着臨床アプローチは、愛着に課題を抱える子どもへの有効な介入であるばかりでなく、援助者支援の観点も含む包括的なアプローチであり、乳児院における養育の特異性を捉えた職員支援を構築する上で参考となるアプローチであると考えられる。

乳児院においては、日常的な安全確保を前提に、愛着の形成・修復が重要であり、愛着の発動・形成・修復期にある乳幼児にとって、愛着の形成・修復は日々の職員との生活の中の相互作用によるところが大きい。乳幼児に話かけや抱っこなどの接触により意図的に働きかけ、声の発し方や表情、動き、活気などから子どもの変化を察知して意志の疎通を図る親密な相互作用、その日々の繰り返しの中で子どもの愛着は形成・修復され、心の中に安定した感情、安心感、安定感を作り出すことができる。そのためには、援助者が安定した状態であるということが、子どもとの関係を構築する上で重要な要因である。職員が子どもの個別的な発達段階を理解し、発達に向けた個別性のある援助ができ、安全で安心できる存在として子どもが愛着行動を向けてくれるような職員のあり様、すなわち愛着の器¹⁷⁾として機能できるように、職員への支援が必要と考える。

V. 結論

愛着研究は、愛着理論の定式化、乳幼児の愛着の型の評定、大人の愛着の型の評定など研究知見が蓄積してきており、愛着の形成に影響する母親側の要因、子ども側の要因も明らかになっている。

また、愛着形成に深刻な打撃を受けた子どもの愛着の形成・修復においては、養育者自身の愛着の課題の統合

と組織化、養育者自身の敏感性と感受性や応答性が、子どもの愛着行動の安定化を図る上で重要な因子となる。

乳児院では、実親を主要な愛着対象者としながら、職員が新たな代替的愛着者として、日々の生活の中で、乳幼児の愛着の形成・修復を支援することが重要である。そのため、乳幼児の愛着の形成・修復を担う職員には、通常以上の感受性の高さや情緒的応答性が必要になる。しかし、乳児院では被虐待、病虚弱・障害、感情表出、養育者との関係などに広範な問題を抱えた関わりの難しい子どもが増加しているにもかかわらず、担当児とさえ個別の接触が持ちにくい状況や、担当児と十分に関わっていない不安感や罪悪感、不全感などがあり、現場の職員は困難を抱えている。乳児院のように愛着の発動・形成・修復期にある乳幼児にとって、愛着の形成・修復は日々の職員との生活の中の相互作用によるところが大きく、援助者が安定した状態であることが重要である。乳児院における養育の特異性を捉え、職員が子どもの個別的な発達段階を理解し、発達に向けた個別性のある援助ができ、子どもが愛着行動を向けてくれるような安全で安心できる存在として機能できるように支援するため、乳児院における愛着の形成・修復を担う直接処遇職員への支援を検討をしておくことが、必要である。

<引用文献>

- 1) 厚生労働省：児童養護施設入所児童等調査結果の概要。厚生労働省, 2009. 2014. 5. 8 検索。
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jidouyougo/19/dl/01.pdf>
- 2) 厚生労働省：社会的養護の課題と将来像。厚生労働省, 2011. 2014. 5. 8 検索
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/08.pdf
- 3) 厚生労働省：社会的養護の課題と将来像の実現に向けて。厚生労働省, 2014. 2014. 5. 8 検索。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_02.pdf
- 4) 厚生労働省：乳児院運営指針。厚生労働省, 2012. 2014. 5. 8 検索。 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/tuuchi-52.pdf>
- 5) Bowlby, J : Attachment and Loss, Vol.1 Attachment. 1969 /黒田実郎, 大羽葵, 岡田洋子, 黒田聖一訳。母子関係の理論 I 愛着行動。岩崎学術出版社, 1976.
- 6) Bowlby, J./仁木武監訳:母と子のアタッチメントー心の安全基地一。医歯薬出版, 1993.
- 7) 久保田まり:アタッチメントの研究の発展。庄司順一, 奥山真紀子, 久保田まり編著, アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる, 明石書房, 65-91, 2008.
- 8) Bowlby, J/黒田実郎訳:乳幼児の精神衛生。日本図書センター, 2008.
- 9) Bowlby, J : Attachment and Loss, Vol.2 Attachment and Loss, Vol.2 ,Separation: Anxiety and Anger. 1973/黒田実郎, 岡田洋子, 吉田恒子訳:母子関係の理論 II 分離不安。岩崎学術出版社, 1977.
- 10) Bowlby, J:Attachment and Loss, Vol.3 Loss: Sadness and Depression. 1980/黒田実郎, 吉田恒子, 横浜恵三子訳:母子関係の理論III 対象喪失。岩崎学術出版社,
- 11) Ainsworth, M. D. S, Blehar, M, C. Waters, E, Wall, S. : Patterns of Attachment:A Psychological Study of the Strange Situation. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, 1978.
- 12) 繁多進:愛着の発達。大日本図書, 1987.
- 13) van IJzendoorn. M. H., Kroonenberg. P. M. : CROSS-CULTURAL PATTERNS OF ATTACHMENT - A META-ANALYSIS OF THE STRANGE SITUATION. Child Development, 59(1), 147-156, 1988.
- 14) 近藤清美:乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定。発達心理学研究, 4(2), 108-116, 1993.
- 15) Main, M. and Solomon, J. :Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In Greenberg, M. T., Cicchetti, D. and Cummings, E. M. (Eds), Attachment in the preschool years (pp.121-160). Chicago: University of Chicago Press, 1990.
- 16) 遠藤利彦：アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する。数井みゆき, 遠藤利彦編, アタッチメントと臨床領域, ミネルヴァ書房, 1-58, 2007.
- 17) 藤岡孝志:愛着臨床と子ども虐待。ミネルヴァ書房, 2008.
- 18) 久保田まり:アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達。川島書店, 1995.
- 19) 久保田まり:アタッチメントの形成と発達。庄司順一, 奥山真紀子, 久保田まり編著, アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる, 明石書房, 42-64, 2008.
- 20) 小山里織:マターナル・アタッチメントと母親の養育行動および1歳児のアタッチメント行動との関連。積木課題場面における母親の教授行動の観察研究を中心に。小児保健研究, 67(4), 565-572, 2008.
- 21) 小山里織:マターナル・アタッチメントの個人差 養育行動及び子どものアタッチメント行動との関連について。人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 10(1), 47-54, 2010.
- 22) 榮玲子:母親の子どもに対する愛着の検討 妊娠期から産後12ヵ月までの縦断調査からの分析。香川県立保健医療大学紀要, 4, 25-31, 2008.

- 23) 岡野禎治, 斧澤克乃, 李美礼, Gunning M. D., Murray L.:産後うつ病の母子相互作用に与える影響 日本版GMII(Global Rating of Mother-Infant Interaction at Four Months)を用いて. 女性心身医学, 7(2), 172-179, 2002.
- 24) 佐藤幸子, 遠藤恵子, 佐藤志保:母親の虐待傾向に与える母親の特性不安、うつ傾向、子どもへの愛着の影響 母子健康手帳交付時から3歳児健康診査時までの検討. 日本看護研究学会雑誌, 36(2), 13-21, 2013.
- 25) 金子一史, 野邑健二, 田中伸明, 瀬地山葉矢, 高橋靖子, 村瀬聡美, 本城秀次:親の抑うつと母親から子どもへの愛着に関する縦断研究 妊娠中期から産後1ヵ月まで. 児童青年精神医学とその近接領域, 49(5), 497-508, 2008.
- 26) 田中和子:子どもへの愛着に影響を及ぼす育児生活に関する肯定感情. 日本母性看護学会誌, 9(1), 47-52, 2009.
- 27) 小木曾加奈子:母親の被養育体験と現在の育児負担感との関連性 子育て支援の連携を求めて. 小児保健研究, 66(5), 688-694, 2007.
- 28) 斉藤早香枝:乳児期の愛着形成における母親の愛着表象と母子相互作用の影響. 北海道大学医療技術短期大学部紀要, 13, 41-52, 2000.
- 29) 古川真弓, 菅原ますみ, 繁多進:アタッチメント形成に影響を及ぼす要因の検討(保育行動, 発達7, 発達). 日本教育心理学会総会発表論文集(30), 136-137, 1988.
- 30) 繁多進:アタッチメントの発達とその規定因. 教育心理学年報 30, 166-167, 1990.
- 31) 高橋一公:“アタッチメント”の構成因子抽出の試み. 立正大学哲学・心理学会紀要(15), 1-20, 1989.
- 32) 斉藤早香枝:子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係, 北海道大学医療技術短期大学部紀要, 11, 19-25, 1998.
- 33) 溝口美鈴:妊娠期・産後における母親の子どもへの愛着と子どもの気質および母親の愛着スタイルとの関連. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 322-324, 2004.
- 34) 斉藤和恵, 山崎知克, 益満孝一, 庄司順一:乳児院入所児における気質調査 愛着形成成功群・困難群における児の気質の経年的変化と背景因子としての生育環境による気質の1考察. 小児の精神と神経, 51, 4, 365-375, 2011.
- 35) 庄司順一:わが国における社会的養護とアタッチメント理論. 庄司順一, 奥山真紀子, 久保田まり編, アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的擁護をめぐって, 明石書店, 92-121, 2008.
- 36) 青木豊:アタッチメントの問題とアタッチメント障害. 子どもの虐待とネグレクト, 10, 285-296, 2008.
- 37) 青木豊:乳幼児-養育者の関係性 精神療法とアタッチメント. 福村出版, 2012.
- 38) Crittenden. P. M.: Abusing, Neglecting, Problematic, and Adequate Dyads: Differentiating by Patterns of Interaction. Merrill-Palmer Quarterly, Vol. 27, 201-218, 1981.
- 39) Howes, C., & Segal, J.: Children's relationships with alternative caregivers: The special case of maltreated children removed from their homes. Journal of Applied Developmental Psychology, 14(1), 71-81, 1993.
- 40) van Ijzendoorn, M. H., Juffer, F & Duyvesteyn M. G.: Breaking the intergenerational cycle of insecure attachment: a review of the effects of attachmentbased interventions on maternal sensitivity and infant security. Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines, 36, 225-248, 1995.
- 41) 金子保:ホスピタリズムの研究. 川島書店, 1994.
- 42) 厚生労働省:「今後目指すべき児童の社会的養護体制に関する構想検討会」厚生労働省, 2007. 2014. 9. 6 検索. [http://www.wam.go.jp/wamappl/bb16GS70.nsf/0/cbccd5dd32ba06c3492572a4001de82e/\\$FILE/20070320_4shiryu_all.pdf](http://www.wam.go.jp/wamappl/bb16GS70.nsf/0/cbccd5dd32ba06c3492572a4001de82e/$FILE/20070320_4shiryu_all.pdf)
- 43) 長谷川昌子, 横山恭子:乳児院における心理士の役割 入所児と保育者とその関係を支えていく機能を担うこと. 上智大学心理学年報, 35, 29-38, 2011.
- 44) 高地陽子, 横山恭子:乳児院における心理士の配置による乳幼児の変化について. 上智大学心理学年報, 33, 89-95, 2009.
- 45) 長谷川昌子, 横山恭子:乳児院における養育形態の構造化とその影響. 上智大学心理学年報, 37, 37-47, 2013.
- 46) 中村友美, 都築悠子, 笠原和美, 原田厚子, 山本百梨花, 今谷功子:乳幼児の愛着行動に基づく個別処遇支援に関する研究 旭川乳児院における愛着形成事業の実践から. 旭川荘研究年報, 39(1), 15-19, 2008.
- 47) 淵野俊二:乳児院における遊戯療法と生活場面での心理的支援 乳幼児期に母親から身体的・心理的虐待を受けた子どもの事例を通じて. 心理臨床学研究, 29(4), 430-441, 2011.
- 48) 淵野俊二:愛着対象イメージが断片化された子どもの遊戯療法 心理士と双方向性の愛着関係を構築した施設入所児の事例を通じて. 心理臨床学研究, 30(1), 29-40, 2012.
- 49) 多賀めぐみ, 中村友美, 吉富美智恵, 土岐寛:家族再統合にむけた取り組み プログラム化した面会の実践. 旭川荘研究年報, 41(1), 81-82, 2010.
- 50) 西原尚之, 稲富憲朗, 平田ルリ子:家族再統合の課題としての世代間葛藤 施設ソーシャルワーカーがおこなう日常的家族療法. アディクションと家族, 22(4), 373-380, 2006.

- 51) 山崎知克, 帆足英一: 乳幼児虐待事例における再統合の現状と課題. 小児の精神と神経, 42(4), 321-331, 2002.
- 52) 大黒剛, 安部計彦: 【虐待を受けた子どもの治療を考える】虐待を受けた子どもの治療 愛着対象としての施設職員のかかわり. 子どもの虐待とネグレクト, 3(2), 243-249, 2001.
- 53) 杉山登志郎: 子ども虐待という第四の発達障害. 学研教育出版, 2007.
- 54) 柴田長生: 対人援助職としての保育士の可能性 2-乳児院・児童養護施設での保育士業務から見えるもの- , 心理社会的支援研究 3, 3-24, 2013.
- 55) 若井和子, 小河孝則: 乳児院に就業している看護師および保育士から見た業務の専門性. 小児保健研究, 70(6), 796-802, 2011.
- 56) 檜原真也, 若林万里子, 須賀美穂子, 若松亜希子, 水木理恵, 西澤哲: 子どものアタッチメント(愛着)とトラウマに焦点をあてた心理療法の有効性の検討(第1報) ACBL-Rによる治療効果の測定. 子どもの虐待とネグレクト, 12(1), 119-130, 2010.
- 57) 若松亜希子, 須賀美穂子, 給前麻実子, 水木理恵, 若林万里子, 檜原真也, 西澤哲: 子どものアタッチメント(愛着)とトラウマに焦点をあてた心理療法の有効性の検討(第2報) 子どもの回復過程に関与した要素の質的分析. 子どもの虐待とネグレクト, 13(2), 255-268, 2011.
- 58) 徳山美知代, 森田展彰, 菊池春樹, 丹羽健太郎, 三鈷泰代, 数井みゆき: 児童養護施設の被虐待児童とケアワーカーのアタッチメントに焦点をあてたプログラムの有効性の検討. 子どもの虐待とネグレクト, 11(2), 230-244, 2009.
- 59) 徳山美知代, 森田展彰, 菊池春樹: 児童養護施設の被虐待児童とケアワーカーを対象としたアタッチメント・ベイスト・プログラム ケアワーカーに対する有効性の検討. 子どもの虐待とネグレクト 12(3), 398-410, 2010.
- 60) 徳山美知代, 森田展彰: アタッチメント・ベイスト・プログラムのモデル作成 : 児童養護施設の被虐待未就学児童とケアワーカーを対象として. 静岡福祉大学紀要 (8), 95-107, 2012.
- 61) 青木豊: 乳幼児期における外傷後ストレス障害(PTSD) . 児童青年精神医学とその近接領域, 45(2), 130-139, 2004.
- 62) 青木豊, 松本英夫: 愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチについて. 児童青年精神医学とその近接領域, 47(1), 1-15, 2006.
- 63) 青木豊, 松本英夫, 井上美鈴: アタッチメント研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチ 1 症例の検討. 児童青年精神医学とその近接領域, 53(1), 2012.
- 64) 吉田幸恵: 社会的養護の歴史. 井村圭壯, 相澤譲治編著, 保育と社会的養護, 学文社, 9-20, 2014.
- 65) 藤岡孝志: 共感疲労の観点に基づく援助者支援プログラムの構築に関する研究. 日本社会事業大学研究紀要, 57, 201-237, 2011.
- 66) 藤岡孝志: 「共感疲労の最適化水準モデル」とファンクショニング概念の構築に関する研究. 日本社会事業大学研究紀要, 58, 171-220, 2012.
- 67) 篠崎智範: 児童養護施設職員の共感疲労とその関連要因. 子どもの虐待とネグレクト 9(2), 246-255, 2007.

<参考文献>

- 1) Levy. T. M, Orlans. M: Attachment, Trauma, and Healing: Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families. 1998/藤岡孝志, ATH 研究会訳: 愛着障害と修復的愛着療法—児童虐待への対応. ミネルヴァ書房, 2005.
- 2) 庄司順一: 社会的養護, 2005/監修仲村優一: エンサイクロペディア社会福祉学, 中央法規出版, 0942-0945, 2008.
- 3) 藤岡孝志: 愛着臨床アプローチの実践—プログラム評価の理論と方法論を用いた社会福祉プログラム構築アプローチ—. EBSC (Evidence-Based Social Care) プログラム評価法研究班 被虐待児回復・援助者支援プログラム分担グループ研究班 文部科学研究基盤研究 A(2007~2010年度) 「プログラム評価理論・方法論を用いた効果的な福祉実践モデル構築へのアプローチ法開発グループ分担研究報告書, 2011.